

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

105

先月、プログラミングの発想力や能力を競う「ぐんまプログラミングアワード2022」をベトナム文化ホール（群馬県民会館）で観覧した。県内では

学生向けのロボットコンテストなども盛んに開催されているので、こうしたイベントの一つとして実際に見に行つたのだ。

私も、若手行員時代にプログラミングに熱中したことがある。きっかけは、それまで手作業だった仕事をパソコンにプログラミングすれば、あっといいう間に終わることに気付いたことだ。

最初の動機は「定時

プログラミング

までになった。その後、管理職になってプログラミングすることはなくなったが、あの時、プログラマーを続ける選択をしていたら、違う人生を歩んでいたと思う。

そんな懐かしさも抱きながら観覧したが、参加者の裾野の広さに驚いた。幼い弟や妹のために、中高生の兄や

に退社して遊びに行きたい」だったが、さらに勉強して複雑な金融商品の価格を計算するプログラムをC++言語で書いて業務に使う

姉が作った学習ゲームなどほのぼのする作品もあった。それ以外のチームも、学校の友達や家族など身近な人たちの「困りごとを解決したい」という想いをアプリやIoTを使つたシステムとして実現していた。

小学生でも使えるプログラム開発ツール本計画によれば、「1

ば、産業全般の生産性の向上に寄与する可能性がある。何より大切なことは、「困りごとを解決したい」という想いを大切にするのだと思う。製品やサービスの付加価値は、作り手が一方的に決めることは出来ない。製品やサービスの受け手の「困りごと」が解決された時に高い付加価値が生まれる。群馬の若き

伸ばせ未来の産業力

や、各種のセンサーを接続するコンピュータと通信網も普及しており、参加者が短期間で使いこなしていたことにも驚かされた。裾野が広がる環境整備も

人当たり付加価値額」が最も高いのは情報通信産業だ。これからの産業を担う若者がプログラミング力を高め、情報処理や通信を駆使できるようになれ

プログラマーたちには、グローバルな「困りごと」にも想いをはせながら、さらに技術を磨いて欲しいと思う。



肥後秀明（ひご・ひであき） 1969年生まれ

茨城県出身。東京大経済学部卒。92年に日本銀行入行後、金融機構局考査企画課長兼上席考査役、金融機構局考査運営課長兼上席考査役などを経て2022年4月から現職。